

8/28
身福

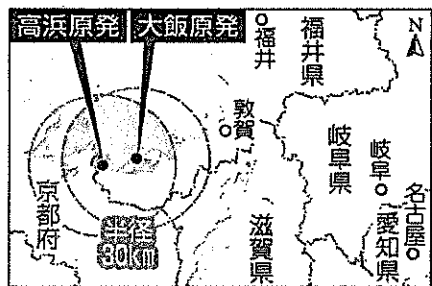
密避け原発防災訓練

県、高浜と大飯の事故想定

新型コロナウイルスの感染拡大中に関西電力高浜原発（高浜町）、大飯原発（おおい町）の同時事故が発生したと想定した県の原子力防災訓練が二十七日、おおい町などで実施された。原発事故の訓練として

全国で初めて、新型コロナウイルスの感染防止対策と住民の広域避難が並行して行われた。■関連③④面

はまかせ交流センターに集まり、うち約二十人はバスで五十五分離れた敦賀市のプラザ萬象まで避難した。一時集合や到着先の施設で入り口の検温で参加住民を感染疑いのある人、濃厚接触者らに分け、待機する



部屋も区分した。コロナの感染疑いの有無や密を避けて分乗したため、三十人の

移動に四台のバスを要した。県と内閣府は高浜、大飯原発の同時事故に備えた広域避難計画（緊急時対応）を七月に改定し、新型コロナウイルスの対策も盛り込んだ。訓練はその実効性を確認するのが狙い。訓練終了後、現地対策本部が置かれたおおい町の大飯オフサイトセンターで会見した桜本宏副知事は「コロナ禍の中で、多数の住民になっても避難を行える

か、確認していく必要がある」と講評した。昨年八月の県原子力防災訓練では約千人の住民が参加したが、今回は訓練で感染するリスクを避けるため

参加住民を大幅に減らした。運営に参加したのは国、県、嶺南六市町、警察、消防など約四十機関の職員ら約三百人。（尾嶋隆宏）

原発事故避難

コロナ対策

両立の難しさを浮き彫り

原発事故時に放射能から逃れるには屋内退避や速やかな避難が必要だが、コロナ対策には三密の回避や時間を要する健康チェックが欠かせず、相反する対策が求められる。二十七日に行われた県原子力防災訓練では住民の避難とコロナ対策の両立の難しさが浮き彫りになった。●面参照(今井智文、山本洋児、沢田一朗)

訓練参加者 不安の声

約五十人が集まった一時「センター」(おおい町)で集合施設の「はまかせ交流」は、町職員が非接触型体温

計で避難者を検温し、新型コロナウイルスの感染が疑われる避難者らを別室に誘導されたが、炎天下で順番を待っていた避難者には、健康でも体温が三七度を超えてしまう人がいた。

参加した漁師の井本健太さん(左)は「もっと多くの人が押し寄せれば、検温せ

ずに入る人もいてスムーズにいかないだろう。自分たち家族は、いざとなったら船で逃げる」と語った。

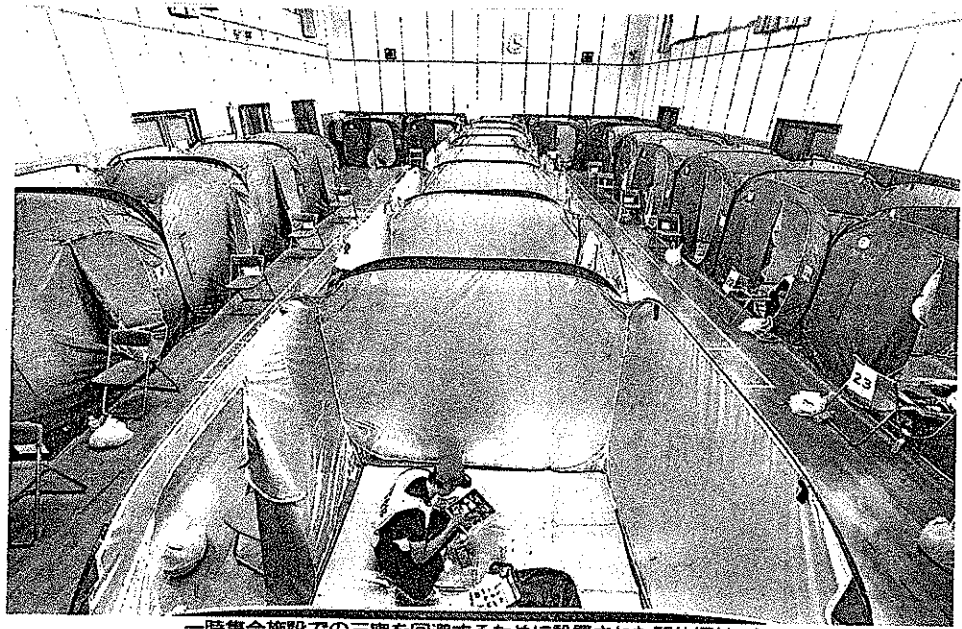
避難者の屋内待機場所となった同センターの多目的ホールには、感染防止のため一人当たり二、三平方以上のスペースを確保できるように、テント型のパーティションが設置された。

ただ、放射性物質が屋内に入らないよう室内の気圧を調整する仕組みがあるのは多目的ホールと和室の一部のみで、多くの避難者が入れれば入りきれない。同町の川尻孝司防災安全課長は「スペースを確保すると人

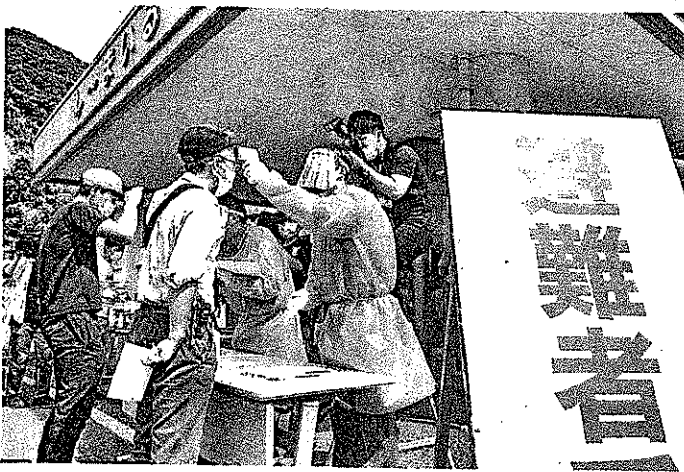
が入りきれないのは課題。時間を空けて第一陣、第二陣と避難させるかなど対策を詰める必要がある」と話した。

敦賀市へのバスでの避難では、コロナ対策で一台当たりの乗車人数を減らし、感染疑いの避難者や濃厚接触者用の小型バスを確保したため、三十人に計四台が必要となった。避難者が予定と違うバスに乗る混乱もあった。

高浜、大飯両原発の同時事故があれば、五、六圏内の避難だけでバス百台以上が必要と見込まれるが、コロナ対策でさらに多くが必要なのは確実。参加した団体職員の男性(右)は「事故で全員が避難することになったらバスを十分に用意できるのか」と不安を吐露した。



一時集合施設での三密を回避するために設置された間仕切り。いずれも27日、おおい町のはまかせ交流センターで(山田陽撮影)



一時集合施設に入る前に検温を受ける住民ら

避難者



避難先に向かうバスに避難者を入れて乗車する中継の